

塩害への強さを見込んで植えられた岩沼市沿岸の菜の花畑。7月には3回目の収穫を迎えますが、連作のためか収量は昨年半分の見込み。エフコープの組合員に、「そろそろ本来の大豆の栽培に戻す時期かもしれない」と日本生協連の東北支援担当の清水 徹(写真手前)は話しました。



# 人のつながりが動かす 商品を通した復興支援

東北地方でも最高気温が30℃に達しようかという5月半ばとは思えない暑い日。

エフコープの組合員理事・職員の4人は、1日かけて

「食のみやぎ復興ネットワーク<sup>\*1</sup>」に参加するメーカーや産地を視察しました。

「なたねプロジェクト」の商品を扱ってほしいという

組合員の声を受けての取り組みです。商品を動かす原動力は、  
支援に関わる人同士のつながりでした。



老舗メーカーの人と  
意気込み、努力を知る

「だしつゆ 四季の味」などCO・OP商品の製造や「ふくしま大豆の会」など生協との縁も深い内池醸造株式会社(福島市)は、創業150年の節目の年に東日本大震災の被害に遭いました。

「あのときは工場内を縦横に走る配管のほとんどが外れ、床がしょうゆでびちゃびちゃでした。しょうゆ造りの生命線である醗のタンクが倒壊、流失したのを見たときは頭が真っ白になりました」と取締役営業部長の岩本日出明<sup>いわもとひであき</sup>さんはエフコープの方々に前に当時の様子を振り返ります。

「毎日地下水の水質を点検し、500万円する検査機も購入しました。うちからは確実に安全なものだけを出荷しています」

衛生管理が徹底された工場の視察を通して、内池醸造(株)のなたね油のドレッシングは今秋、エフコープの宅配チラシ「よかもん」で取り扱われる予定です。

設立30周年企画の支援活動が  
みやぎ生協とつながる

エフコープは、復興支援として東



新商品「菜の花オイルのしょうがドレッシング」を開発した内池醸造(株)の赤間千尋<sup>あかまちひろ</sup>さん。「カルパッチョなどの生もの他、野菜炒めなどにも使えます」

北ゆかりの商品を販売。その利用代金の一部を使って、設立30周年を記念して開発した「とよみつひめのしっとりバターケーキ」36個を、みやぎ生協が運営する「ふれあい喫茶」にお届けしました。

この取り組みを通して、組合員理事の江口瑞枝<sup>えぐちみずえ</sup>さんは、商品による復興支援を強く意識するようになりました。

そんな折、3月の「つながろうCO・OPアクション交流会」で、コープ東北サンネット事業連合・店舗商品本部の藤田孝<sup>ふじたたかひさ</sup>さんと同僚「ブルになり」食のみやぎ復興ネットワークの取り組みについてお話を伺う機会を得ました。

同月に博多で開催した復興支援全体報告会にみやぎ生協組合員理事の高橋誠子<sup>たかはしせいこ</sup>さんをお招きし、「な

<sup>\*1</sup> 宮城県内の生産者や食品関連業者が共に地域復興を目指すことを目的に2011年7月に結成。みやぎ生協を中心に235団体が加盟している。(2014年6月現在)

たねプロジェクト」について報告いただいたところ、参加した組合員から商品を企画してほしいという声がたくさん上がりました。

藤田さんにエフコープから電話があったのは翌4月のこと。「食のみやぎ復興ネットワーク」で取り扱っている商品を私たちの生協でも取り扱わせてほしい、メーカーとの視察・交流もお願いしたいという要望を受け、5月14日にこの企画が実現しました。

### 地元の原料を使えば みんなにとっても特別なものに

内池醸造(株)を後にした一行が次に訪問したのは、震災後、社屋兼工房を建て直した有有限会社蔵王の昔館本舗(宮城県大河原町)。同社は昔ながらに一釜ごと丁寧



再会した3人の組合員理事。左からみやぎ生協の高橋誠子さん、エフコープの佐藤智重さん、江口瑞枝さん。

を練り上げ製造しています。「われわれがどんなに頑張っても百点満点で49点まで。あとの半分以上は原料で決まります。素材だけでどこまで味が出せるかの世界で、ごまかしが利きません」という代表取締役の佐藤敏徳さんのもとには、「食のみやぎ復興ネットワーク」のほかにも地元の高校生が作った梅やみそなどを使った餡の製造の話が持ちかけられます。

組合員活動部の安元正和さんには腹案があります。エフコープでは、毎年、夏場の熱中症対策のひとつとして、宅配事業の現場スタッフ全員に塩飴を配布してきました。今年も、同社の「塩竈の藻塩飴」を配布し、多くのスタッフが復興支援について考え、語れるようにしていきたいと考えています。



有蔵王の昔館本舗 代表取締役の佐藤敏徳さん。こだわりの製法と原料を大切に作る姿勢に、依頼も多い。

さらに、江口さんたちは福岡県産ブランドのイチジク「とよみつひめ」で餡を作れないか提案しました。「水っぽいのは難しいが、濃厚なイチジクならいけるかも」と言う佐藤さんに、大分産の柚子こしを使うことも提案。「地元の原料を使って東北で作ることで、被災地とのつながりを深めたい」と意気込みます。

### 商品を通した復興へ 走り出す組合員と職員

次に訪れたのは蒲鉾メーカーの株式会社佐々直の名取市に再建した工場。専務取締役の佐々木市哉さんは、津波が襲ってきた当時の写真を見せてくださいました。閉上にあつた社屋は壊滅的な被害を受け、従業員5人が犠牲になりました。

「内陸に移転した工場はあくまで仮設。ラインも1本しか稼働していないし、販路の見込みがなければ投資もできない。状況は厳しいが、いつかは創業の地、閉上に戻りたい」と佐々木さんは事業再建への思いを語ってくれました。

視察後は試食の時間。出来たての蒲鉾はふんわりした食感です。「普段食べ慣れているさつま揚げとは全然違うね。脂っこくなくすつき



閉上地区の日和山湊神社の慰霊塔に祈りを捧げるエフコープの板井勝治さん。眼下には復興というにはまだほど遠い風景が広がる。

りしている」「炙ってお弁当でも使えそう」と江口さんは同じ組合員理事の佐藤智重さんと顔を見合わせました。

取り扱いが決まれば、江口さんたちはエフコープの復興支援実施チームとして23の委員会で報告し、組合員の仲間に利用促進を呼びかけます。職員との関係でも、店長・支所長が集まる事業所長会でプレゼンを予定しています。9月には約40人の組合員を東北に引率する予定で

一行は、被災した佐々直の旧社屋を見下ろす高台の慰霊塔に献花して、震災の犠牲者に祈りを捧げました。

エフコープの皆さんは今回の視察で、またたくさんの人となりがつて、やりがいとやることを見つけたようでした。

※2 消費者・生産者・加工業者が一体となって、安全・安心な県内産の大豆の生産と消費を進める取り組み。消費者団体としてコープふくしま、加工業者として内池醸造(株)が加盟している。

